

【学校教育目標】 夢に向かって 自ら学ぶ 豊かで たくましい生徒

黒西中だより

TEL 048-768-5454

心のホット相談室 TEL 048-764-1110

<http://kuronishichu.style.coccan.jp/>



第 7 号

令和5年11月1日

生徒数		
1年	84名	3学級
2年	91名	3学級
3年	98名	3学級
4組	3名	1学級
5組	2名	1学級
合計	278名	11学級

『Hey Jude』 作詞・作曲 Lennon-McCartney

校長 檜田 光東

朝夕の風がめっきり涼しくなり、草むらからは虫の鳴く声が響き、本格的な秋の訪れを感じる季節となりました。子ども達は、落ち着いて勉強に運動に委員会活動に部活動にがんばっているところです。

各学級では合唱コンクールに向けて、音楽の授業だけでなく朝、昼休み、放課後の時間を使って練習し、校長室まで子ども達のきれいな歌声が聞こえていました。そういった音楽や合唱練習の時間以外にも学級から歌声が聞こえてくる時があります。それは英語の授業の時です。英語の歌を学級で歌う声が廊下に聞こえています。

私も英語の授業の始めにウォーミングアップとして必ず「今月の英語の歌」を歌っていました。英語の歌を歌うと教室の雰囲気は英語の授業の雰囲気へと一変し、子ども達の頭が英語で考える脳へと切り替えるきっかけになる。気分も高揚し「英語で話したい。」という気持ちが強まったり、自然と英語特有のリズムに慣れたりすることができる等、英語の歌を歌うことの効果は他にもたくさんあったと今では思いますが、その当時は英語の歌、洋楽が好きで子ども達といっしょに歌うのが楽しくてやっていました。

私の初めての卒業生にあたる方々はすでに48歳位になりますが、その時の野球部員数名とは今でも連絡を取り合いたまに会ったりしています。次はその中の一人の話で今から10年も20年も前のことだったでしょうか。彼らから連絡が入り、久しぶりに会うことになりカラオケに行った時の話です。

みな、思い思いに自分の好きな歌を歌い盛り上がる中、彼がおもむろにThe Beatlesの名曲『Hey Jude』を予約しました。私は「大丈夫かな。」と余計な心配をしました。やがて彼の順番になり、彼は歌い始めました。

“Hey Jude. Don't make it bad. Take a sad song, and make it better.

Remember to let her into your heart. Then you can start to make it better・・・”

音程も声も英語もしっかりしていて上手。歌詞の意味が伝わってくる。歌い始めると大きな拍手が起こり、歌い終わり、みんなから彼に改めて大きな拍手！！私は彼に「すごいね〜！」と話すと、彼は私に言いました。

「会社の仲間の前でこれを歌った時に『すごい、うまいね。こんな難しい英語の歌が歌えるなんてすごい！』と言われたんですよ！英語の授業で英語のことは何一つ覚えていないけど、この歌はしっかり覚えてるんですよ。」と冗談半分（だと思いたいのですが）で彼は私に言いました。

私は授業で新しい英語の歌を最初に歌う時は、原曲を聴かせ歌詞の意味を説明しメロディー無しで歌詞をリズムに合わせて言う練習をし、アカペラで私がフレーズ毎に歌った後にリピートさせ、原曲に合わせてまた歌ってみる等して授業を進め、気づくと50分授業すべて使い切ってしまうことが度々あったほど力を入れていました。

それでも、正直、あまり英語が得意でなかった彼が、こうしてカラオケで英語の歌を、しかも難しい“Hey Jude”を見事に歌い上げ、会社の仲間や旧友から拍手喝采を受ける場面を、当時は想像できませんでした。

私達は「日々の教育活動が子ども達に必ずいつかどこかで役に立つという強い信念を持ち、誠実に毎日教壇に立たなければならない。今すぐに効果が現れないかもしれないが無駄なことは何一つなく、いつかどこかで私たちの話したことや、教育活動が役に立ち、成長し続ける将来の子ども達を支えることができる。」そう信じて今後も教職員一丸となって教育活動に取り組んでいきたいと学級から流れる英語の歌を聴き改めて思いました。

保護者の皆様、地域の皆様、2学期も後半戦を迎えますが、今後も本校の教育活動に対して、変わらぬご理解とご支援とご協力をいただきますようお願いいたします。

彼はその後も私の影響で好きになったシンガーソングライターの歌を歌い、これまた上手でした。彼は高校時代に知り合いの方から、そのシンガーソングライターの自分の名前も書いてもらった直筆のサインをいただいたということで私もその実物を見せてもらいました。色紙に〇〇へ Shogo（実際は筆記体）と書いてあり本人の直筆に間違いありませんでした。「先生にこれ、あげるよ。」と押し入れにしまったものを取り出してきて彼は「言ってくれましたが、「これは、もらうわけにはいかない。君がもっていて価値があるものだから。」と、良心と忍耐をもって遠慮した記憶があります。（でも色紙のコピーはもらい、大事に取ってあります。）」